

『越境スタディーズ』出版記念講演会

「越境 (国際化) プロジェクト」と 国際社会コミュニケーション学科の研究・教育の実践 ——丸井一郎先生の研究・教育の20年を振り返りながら——

*本稿は、2015年4月22日に高知大学人文学部棟で開催された『越境スタディーズ』出版記念・丸井一郎先生(高知大学名誉教授)講演会の内容を収録したものである。

1 司会の挨拶と丸井先生の紹介(森 直人 准教授)

そろそろ時間となりましたので、始めさせていただきたいと思います。本日は「『越境 (国際化) プロジェクト』と国際社会コミュニケーション学科の研究・教育の実践——丸井一郎先生の研究・教育の20年を振り返りながら——」と題しまして、このプロジェクトで今年3月に出版することができました、『越境スタディーズ』の出版を記念しつつ、2015年3月末にご退職された丸井一郎先生の研究・教育の歩みを振り返っていただくという趣旨で、講演会を企画・開催させていただくことになりました。大変ご多忙のところかと思いますが、教員・学生の皆様、一般の方々、今日はお来場くださりまして、本当にありがとうございます。本日司会を務めさせていただきます、国際社会コミュニケーション学科の森直人と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

丸井先生からのお話に先立ちまして、本日の趣旨と丸井先生のご紹介を、10分ほどさせていただきますので、まずはこちらにお付き合いください。

高知大学人文学部では、「キーワード型研究プロジェクト」ということで、1998年から足掛け17年間、高知をフィールドとした形で共同研究プロジェクトを動かしてきました。この度、2015年3月に、3つ目の研究成果として『越境スタディーズ』¹という本を出版することができました。ここまでいろいろなことがありながら、17年間共同研究を続けることができたわけですが、実は、この研究の歩み、それから国際社会コミュニケーション学科の教育の歩みというのは、丸井一郎先生の研究・教育へのご尽力と全く切り離せませんでした。つまり、丸井先生がずっと学科の研究・教育の原動力であり続けたわけでございます。2015年3月に退職されたという機縁もございまして、出版記念と合わせまして、丸井先生の研究・教育の20年をふりかえっていただくことを通して、学科でこれから研究・教育をしていくメンバー、それから高知大学の学生・教員の方々が、丸井先生がどういう歩みで研究・教育をされてきたのかをこの機会に知るとともに、受け継ぐことができるものをできるだけ受け継いでいく機会とさせていただきたいと思い、今回の講演会を企画した次第です。

©高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科

¹ 高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科 岩佐和幸・岩佐光広・森直人編『越境スタディーズ——人文学・社会科学の視点から——』リーブル出版、2015年。

みなさんにとって、丸井一郎先生はほとんどご紹介の必要もないぐらい、よくご存じのことだと思いますが、少しでもご紹介させていただきたいと思います。

丸井一郎先生は、高知大学名誉教授で、1995年4月に愛媛大学から転任されてから、2015年3月末までの20年間、高知大学人文学部にて研究・教育に従事されてきました。研究業績は、2006年に出されたご著書『言語相互行為の理論のために』をはじめ、単著・共著あわせて10点、学術論文55点、学会発表30件、報告書14件、その他、講演・書評等多数にのぼっています。また、多年にわたり、非常にたくさんの卒業生の指導、ほとんど無数と言ってもいいぐらいの学生への講義等、教育にもご尽力されてきました。ただ、丸井先生の詳細な職歴や研究業績については、今日お配りしている資料をご覧くださいこととして、この場では主に丸井先生がこの学科とこのプロジェクトにどのような関わりを持ってこられたか、この学科にとってプロジェクトにとって丸井先生がどのような存在であったか、ということをご紹介させていただきたいと思います。

国際社会コミュニケーション学科は、1998年4月、当時人文学部を構成していた人文学科・経済学科の2学科から国際に関連する教育の教員が参加して設立されたものでした。この学科の設立当初から、「人文学・社会科学の分野横断的な研究教育によって既存の枠組みを超えて変容する国際社会のあり方をとらえていこう」と、分野横断的な学科であるということが、すでに設立の意のなかで打ち出されておりました。実は、その設立主意書の執筆に携わったのが、当時まだ着任されてからまだ2・3年ほどの丸井先生でした。また、学科の設立だけでなく、その後、1999・2000年度には、丸井先生が2代目学科長を務められまして、以降2005・2006年度、それから2011・2012年度と、3期にわたって国際社会コミュニケーション学科長を務められました。文字通り、学科の運営と教育の中心人物のおひとりであったわけですが、実はこの国際社会コミュニケーション学科と本日主催の研究プロジェクトには、車の両輪のような密接な関わりがありまして、このプロジェクトにとっても、丸井先生の存在が非常に大きな原動力となっていた、ということがございます。

研究プロジェクトは、当時は、「高知における国際化プロジェクト」として、学科の設立と同じ1998年に発足しました。分野横断的な学科の特性に応じて、教員の間で有機的な研究交流を深め、教育・研究の内実を発展させるために、それから教員がベースを置く高知という地域に焦点を当てて研究・教育を活性化するために、このプロジェクトが発足したわけでした。やがて「高知における国際化」というプロジェクトから「越境プロジェクト」という名前が変わりまして、そのなかでも当初の「高知・越境する人と文化」から「交流する社会・文化」、そして現在の「『持続可能性』と地域・交流プロジェクト」という形でバージョンアップを重ねてきた形になっております。このプロジェクトに参加しているのは、主として学科の教員なのですが、メンバーは言語学・コミュニケーション論から文学、比較文化、そして経済学をはじめ社会科学のいろいろな領域にまたがっていて、非常に多様な分野の中で交流していかなければなりません。また高知という地域を研究対象として研究交流をしていくという形ですので、研究領域の垣根を越えていくのが、容易なことではなかったわけです。それでもなお、17年間の間、規模を拡大しながら継続的に研究を行ってこられたのですが、その主要な原動力の一つは、またこれも丸井先生の非常に広い学識と、それから研究教育にかけるエネルギーであったとすることができるのではないかと思います。

略歴にある研究業績をご覧くださいれば分かるかと思いますが、丸井先生の専門的な学識というのは、そもその志であった音楽学にはじまり、修業時代の言語学・ドイツ語研究、やがて言語テクストの研究から言語行為研究・言語相互行為研究へ、さらにコミュニケーションと生活世界そのものの探究へと進む中で、社会学や飲食文化研究・飲食生態研究、地域研究や現代の日本社会への

批判的研究へと、非常に大きく広がっていくわけですね。こういった形での学識の深化・拡大にもみられるとおり、研究と教育にかかるエネルギーの激しさというのは、学科の教員の間でもほとんど誰にも真似できないような、そういった強さがある。こういった学識の広さと深さ、そして研究にかかるエネルギーが、分野横断的な学科の研究プロジェクトの中をずっとつないでおり、プロジェクトが発展しながら継続してこられた大きな要因になっているのではないかと思います。

ここまでの説明だと、丸井先生をなんとなくスーパーマンのように持ち上げて、ちょっと非人間的な人のように思われてしまいますので、思い出をちょっとだけ付け加えてみたいと思います。私が2007年に着任したときに、学科の皆さんが歓迎会を開いてくださったのですが、だいたい始まって2時間くらいたって、お酒もまわって皆さんリラックスするようになり、私もやっと緊張が解けて楽しくお話をしている時のことです。私はデビット・ヒュームという哲学者を研究しているのですが、そういうタイミングで、突然真顔で「ヒュームというのは、何が面白いんですか」と、正面切って聞かれました（笑）。丸井先生というのは、こういういちばんリラックスした時に、いちばん研究の中心的な質問が出てくるぐらい、研究と生活が結びついている方なんだな、ということを、非常に実感いたしました。

でも、私にとって、丸井先生が持っている魅力というのは、その研究や教育にかかるエネルギーだけではなく、ふとしたときに出てくるすごく深い、人間的な優しさをお持ちになっているところにあります。つまり、そういう激しいエネルギーと人間的な優しさが同居しているところが丸井先生のお人柄だと思います。2013年から、私は在外研究の機会をいただき、1年間イギリスに行ってきたのですが、その直前にお話をした際に、「もしイギリスで困ったことがあったら、素直に誰でも助けを求めなさい」という風に言われたことがありました。「助けを求めることで、道が開けることが必ずあります」と、その時声をかけてくださり、非常に染みてくるような言葉だなと感じました。ヨーロッパでの研究が非常に長い丸井先生からそのようなお言葉をいただけたのが、大変心強かったです。ここでは詳細は省きますが、実際にイギリスで研究生活を送る中で、丸井先生の言葉を非常に実感して、「本当にその通りだ」と思うことがありました。そうしたふとしたときの優しさというものを、非常に強く感じる場所があります。もうひとつ余分な話をすると、その直前の歓送会のときに、サバティカルの準備で、バテ気味だったのですが、歓送会がひけた後で「もう一軒行きましょう」と強く誘ってくる方がいらっしゃって、もうちょっと体力的に無理だなと思っていたのですが、その時に丸井先生が「今日は帰してあげなさい」と諭してくださり、危うく難を逃れるということもありました。そうした本当に人間的な優しさに、丸井先生の魅力を感じた次第でありました。

丸井先生の学識の広さ・深さ、それから研究・教育にかかるエネルギーというのは、誰にも真似ができないというふうに先ほどお話しましたが、それでも学科運営を後で預かるメンバー、それから学部でこれから中心になって支えていくメンバーにとっては、丸井先生のそうした力をできるだけ受け継いでいかなければならないのではないかと思います。

本日は丸井先生の研究・教育の歩みを振り返っていただく中で、私たちが受け継いでいけるものを受け継いでいく、そういう機会にさせていただければというふうに思います。充実した講演会にさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。それでは丸井先生、よろしく願いいたします。

2 丸井一郎先生 講演

——「越境(国際化)プロジェクト」と国際社会コミュニケーション学科の研究・教育の実践——

初期の研究テーマ：言語相互行為理論の研究

みなさん、こんにちは。改めて言うのも何ですが、あまりに素晴らしいお言葉をいただいて、もう「穴があったら入りたい」という感じです。今日は、お披露目記念ということもあって、この本『越境スタディーズ』に書いた内容について、少し触れることができますと思います。その前に、最初に「20年間、何をやってきたか」ということについて、少しお話しします。

学科の紀要『国際社会文化研究』の最新号に、研究履歴を書いておりますので、ここへ来るまでの20年間については、そちらを見ていただければ、だいたい分かると思います。一言でまとめると、要するに英語・ドイツ語・日本語といった言語、それからコミュニケーション研究ということになります。そして、何が一番ポイントだったかという、自分の母語でない、自分がその社会で社会化プロセスを体験したことがない社会について、「外から」研究するというのは一体どういうことなのか。それで何ができるのか。そのようなことを、根本的に理論的に考える必要があるだろうということ。最初の20年間の研究は、これがすべてですね。とにかく異言語についての研究がメインでした。

ちなみに、「外国語」という用語は、欠陥概念です。これは、スイスに行ってみれば、一発で分かることです。スイスには、4つの公用語がありますよね。イタリア語をしゃべる誇り高きスイス人と、ドイツ語をしゃべる誇り高きスイス人は、相手の言語を勉強しなければ、お互いに一言も分かりません。では、その人たちの言葉は、同じスイス国民同士なのに、外国語なのでしょう。だから、外国語という用語自体が、もう欠陥用語なのです。それに対して、「異言語」という概念を、かつて大阪外国語大学にいた梅田先生(朝鮮語学)が提案されていたのですが、これがいい案だと思って、早速使わせていただくことにしました。つまり、「異文化」という言葉があるわけだから、「異言語」があつて当然ですよ。だから、国というものと関与させないということ、つまり「ボーダー」ですよ、越境の要因だと思います。

今度は、逆の例を出してみましょう。ミュンヘンの人とザルツブルグの人は、ドイツ語に関してほとんど何の問題もなく理解できます。けれども、同じドイツ連邦共和国内でも、ハンブルクの人、もし案内がなければ、ほとんど分かりません。むしろ隣の国、オーストリア共和国のザルツブルグの人の方が、ドイツ連邦共和国のミュンヘンの人にとってははるかに分かりやすい。これは本当の話ですが、北ドイツの人が、バイエルンの田舎に行って、飲み屋に入って注文しても、全く通じないので、しょうがないから、英語でしゃべったということもあります。だから「境目・ボーダー」というのは、いったいどこにあるのか、ということですね。無論、国家というのはやはり絡んでくる側面があるのですが、「それはどこなのか」というのは、それぞれ分けしながら考えないと、うまくいかないだろうということですね。それから、この本を読んでいただければ分かりますが、最初の4つの章、古閑さんと私と森さんと岩佐光広さんの章は、ほぼ同じような視点で書いてあります。つまり、ボーダーというのは何なのか、どこにあるのか、という視点です。

結局、20年間かけて、どこに視点を設定すれば、今言ったような問題がうまく具合に取り扱えるようになるのかを考えてきて、たどり着いたのが、言語相互行為、インターアクションという理論領域を設定すれば、いろんなことが説明しやすくなるということでした。ちなみに、その中には、

音楽も取り込むことができます。一方、ボクシングはコミュニケーションでしょうか。コミュニケーションとは、ちょっと言いづらいところがありますよね。相手の意図を理解し、お互いがお互いにどういう意図でそこにいるのかをちゃんと分かった上で、お互い全く相反する目的に向かってやる。それでちゃんと紳士的に「ここから下は打たない」とか、「ロープには飛び上がらない」とか、ルールはちゃんと守ってやるわけですから、これもある種の相互行為、その形式であるわけです。

こういうのは、一般的には「生活形式」といいます。“forma vivendi, forms of life, Lebensformen”。この概念自体は、もう2千年以上の歴史を持っています。エラスムスの頃ぐらいまでは、まだ使われていたのですが、一時期忘却されて、だいたいドイツのロマン派の頃から、特に19世紀末にかけて、概念として復活するようになりました。ヴィトゲンシュタインなんかが使って非常に有名になるわけですが、彼の発明ではありません。もうすでに、古典ギリシャ・ローマの頃にはあった概念で、我々、文明化されたローマ人やギリシャ人から見て、スキタイ人とかケルト人とかゲルマンの連中がわけのわからないことをやっている、そのわけのわからない暮らし方が自分たちとは違う、今でいうところの「異文化」ですよ。そういう来歴のある概念で、これが非常に面白い。

そういう視点の設定ができたので、いろんなことの整理整頓がしやすくなったわけです。だから、この本を読んでもいただければ分かるのですが、「言語とは何なのか」ということも非常に大きな要因で、言語というのは、多くの場合、仮構です。例えば、オランダ語は北部変種の西ゲルマン語・ドイツ語だったわけですが、今、オランダへ行って、「オランダ語はある種のドイツ語だ」なんて言ったら、殺されますから(笑)。オランダは、例の30年戦争(スペインとは80年戦争)の結果、スペインから独立するんですよ。そして、その過程を通じて対自的に成立するのが国家語オランダ語であるわけで、「お前たちのドイツ語とは違う」ということになった。いずれにせよ、人間のやっていることをいろいろ見ていると、「同じか/違うか」「差異/同一」、要するにボーダーですね、それがどこでどういう風に設定されるかということが、非常に面白い出来事であり、仕組みだと思っています。

例えば、日本だと、いわゆる共通語と地域の言語とがあって、これは社会言語学的に言えば地域言語であって、日本という社会は二言語併用だという風に捉えてもいいわけですね。ドイツ語圏の場合は、その傾向が非常に強いです。でも、これもイギリスでは違います。イギリスの社会言語学者は、ドイツの同僚に向かって、「あなた方がドイツでやっていること(地域の言語を使うこと)は絶対にイギリスではやるな。あなた方は、大変悲惨な評価を受けることになるだろう(能力・教育がない、逆に地元民をからかっている)」と言う。そういうことを、実際に見聞きしたことがあります。

いずれにせよ、自分の第一言語・母語ではない別の言語で、その人たちが作っているやり方、用語でいうと「生活形式」、それからその人たちが「自分たちはそこに住んでいる」と想定的にみなしているところの「生活世界」というものを、どういうふう捉え、それを経験的に方法論的に捉えるにはどういうやり方がふさわしいのだろうか、ということで、いろいろ考えていたのが、最初の20年間くらいです。

途中で例のポライトネス研究の大流行(大猖獗?)とかがあったりして、これもやはりある種の疑似問題だと、私は考えています。興味のある人は、また後で。今、ここでやるわけにはいきませんから。それで、この本にも書いたのですが、ある生活世界に住んでいるとそう自分が思っている人たちと、そうではないと自分で思っている人たちとが話をしたらどうなるか。無論、これは原則的に、異文化間コミュニケーションですよ。日本の人とドイツの人とか、中国の人とどこの国の

人とかを言う必要はないのです。コミュニケーションは、原則的に異文化間コミュニケーションのポテンシャルを持っているわけです。

だから、「異文化間コミュニケーション」という用語自体が要るのかどうか。むしろ、いらんんじゃないか。「相互行為の様態におけるバリエーション、差異と多様性」、これだけで十分じゃないか、という風に、今では考えています。あまり異文化を強調しすぎると、(同じ本で岩佐光広さんも書いていますが)「イギリスと日本は違うんだぞ」と言うのと「イギリスはイギリスで全部同じ。日本は日本で全部同じ」で、日本の中に客観的にあるはずの差異を見落としてしまうことになりま。これは非常に危ない。特に、日本語教育などに携わっている人は、この辺りのことは大きな問題だということが理解できると思います。

言語相互行為理論から越境プロジェクト研究への展開

20年前に高知大学に赴任して来まして、たまたま渡邊輝道先生(元人文学部長)に本学科の設立の仕事に引っ張り込まれました。全国的にも大きな改組の時期で、いわゆる「国際」という言葉がよく言われるようになった時代だったのですが、その頃「なんかちょっと違うんじゃないのかな。国際じゃないよね」という感じがしていました。今は本学科にはいらっしやいせんけれども、立ち上げの中心人物だった田中宏先生と故松尾國彦先生のお二人が、改組をめぐって人文学部の正面玄関で激しく怒鳴り合うほどの激しい議論があつてできたのが、国際社会コミュニケーション学科です。以前は人文学科と経済学科の2学科があつて、なぜか知らないけれども仲があまり良くなかった。そこで「学科が2つだと難しいけれども、3つあると安定するんじゃないか。中に何か1つ学科を置いたらどうだろうか」というアイデアが出てきました。無論、このような悪知恵は、渡邊先生の思いつきでしたが、それにふさわしい学科ということで、当時はいわゆる国際ブームだったものですから、国際社会コミュニケーション学科に最後は落ち着きました。でも「単に国際というわけではない」といろいろ考えました。実際に、いろんな分野の教員に動いてもらうわけですから、なかなか大変です。その方自身も、不本意だということもあるだろうし、そういう時期がありました。1997・98年頃ですね。

1998年に新学科が発足して、私自身は1999~2000年に学科長をやりました。本当に実務が膨大で、学科長じゃなくて雑科長ですね。ともかく、このようなタイプの新学部・新学科にふさわしい、あるいはもう少し広げた形でのプロジェクトを立ち上げることになりました。立ち上げは、初代学科長の天羽康夫先生の力です。あの当時は、どこからどういう風につけていいかわからないところもあったのですが、『越境スタディーズ』の273ページにも記載があるように、「高知における国際交流」というシンポジウムを2000年の6月に行いました。このときは、奥村多喜衛[高知出身の牧師。ハワイ日系移民の功労者]の研究で有名な中川美佐先生が基調講演をされ、岩佐和幸先生もこの段階でおられて、渡邊先生も学部構想について講演されました。この辺から始まったのです。たまたま整理整頓しようと思って見ていたら、2000年という年はこのシンポジウムが行われた程度だったと思います。2003年にちゃんとした正規の図書を発行していますが、だいたい2000年頃から始まったわけです。

お配りした資料[本稿末尾に収録]は、越境プロジェクト関連の私自身の成果と、本来やっていた言語相互行為の理論に関わる成果をまとめたものです。自分で並べてみて、案外1対1でやっているなあという感じです。見たらわかるように、当初は越境プロジェクト関係が少ないですよ。

報告ぐらいしかありません。本来の言語相互行為理論の方が多かったのですが、次第に両者がほぼ同じくらいの量になって、最後のあたり、2010年以降になると、括弧を付けていない成果が出ています。この何の括弧もしていない成果は、1つの理論の中でなんとか両方取り上げることができるようになったという判断です。1つは、この本ですが、もう1つは、具体的に何をやっていたのかということです。昨年末に愛媛大学で開催された日本コミュニケーション学会で発表した内容を駆け足でまとめましたが、具体的に「こんなことをやるんですよ」ということを、あとで少し紹介します。

紀要の研究履歴などにも書いたのですが、研究を始めた頃から、直感としてはありました。DAADのお金をもらって、1980年ぐらいにドイツに滞在したときに、今の言葉で言うと（当時はまだそこまで分かっていなかったのですが）、コミュニケーションと飲食事象は、出所は同じではないか、という直感がありました。今、言われている言葉で、もう少し簡単に言いますと、文化人類学などの分野で「人間とはどういう存在か」といえば、食べ物を持ち寄って、火で調理して、それで一緒に食べる人たちである、という説明をしますよね。でも、我々から言うと、1つ足りないんです。それは、「一緒に食べて、それで終わりですか」、つまり、コミュニケーションをするということです。コミュニケーションとは、歌ったり踊ったり、お話したりするといった、相互行為ですね。だから、「人間とは何者か」というと、今の定義をもうちょっと拡張しようということになります。

お猿さんなら、そこで食っちゃまうんですね。持って帰ったりしません。人間の場合は、例えば、そのまま食べられるものだけじゃなくて、調理しなくちゃいけないものを集めてきて、みんなで持ち寄って、場合によっては調理プロセスそれ自体に分業、つまり協調行動ですね、「お前はあれをやれ。私はこれをやる」というふうにします。太古の生活形式ですから、そうやってコーディネートしないとできないわけです。これは当然コミュニケーションですよ。そうすると、当時は単なる直感でしたが、おそらく飲食事象と相互行為・コミュニケーションというのは、根が同じか近いところにあるはずだということですね。

石毛直道さんなどが書いていますが、食べ物を持ち寄って、火で調理して、「共食」・一緒に食べるわけですが、「なぜ一緒に食べるのか」というところに関して、例えば現代で言うところの社会学者で、この道では一番の権威とされている研究者がいますけれども、この人も全くちゃんと説明できていないですね。例えば、単に栄養を摂るだけなら、むしろ人と分かち合うのは損で、自分だけこっそり食べた方が、たくさん摂れるじゃないか、と。いや、そうじゃないですよ。コミュニケーションの進化、ヒト化のプロセスで何が起こったのかについて、単なる推測ではなくて、それなりの観察事実に基づいた論になるのは、最近のことです。霊長類学や脳科学からランガムやパウアーなどといった人たちが出てくる。ジグソーパズルみたいに、だんだんいろんな分野の経験的な研究が集まってくると、直感はその間に違っていたはいなかったと思います。

特に、今の話とは違って、1990年代末から2000年、現今にかけて、爆発的によく知られるようになったことがあります。それは、神経生物学や神経心理学です。もっと具体的に言えば、「ミラーニューロン」の発見です。これは、イタリアの科学者たちが偶然発見した成果です。お猿さんの脳で。簡単に言うと、イヌもサルも我々も、特に人間の場合どういう能力が発達しているかということ、相手が何かをやった時に、それに注目すると、私はそれを共感的に、同時にやっているような体験を、脳の中でしてしまう、そういうことがあるのです。

これは、パウアーも言っています（彼は自然科学者ですから、もともとは方法的個体主義から出発するわけですが）、脳の仕組みを調べて最後に何が分かったかということ、「ソーシャル・プレイ

ン」だったわけです。人間の脳は、他者が周りにいることが前提でできている。人間の脳は、他者が周りにいるときのみ発達し、機能するということがわかってきました。これは、2000年代に入ってから確立された考え方です。そのきっかけとなった決定的な研究が、イタリアの研究者によるミラーニューロンの発見と、その帰結の追求でした。

簡単にいうと、野球が好きなのが、テレビの中継でもいいし、実際にバックネット裏でもいいですが、プレーしているのを見ると、「ああーっ」と一緒に体験できますよね。けれども、野球ではなくて、全くやったことがなく、ルールも知らないスポーツだったら、どうですか。「なんであいつらは、あんなことをしているんだ？」というように感じますよね。そういう風に、興味が集中すればそうなのですが、要するに、共に体験することができるというのは、単なる模倣ではない。共同体験に基づく、何かそういう仕組みがあるということが分かってきました。これは、単に見るだけじゃなくて声でも、ありとあらゆるチャンネルで、例えば「心の理論」というのもご存じの方がたくさんいらっしゃると思いますが、「この人は、今、どんな気持ちだろう」というのは、顔つきとか声の調子とか、いろんなところからなんとなく推測できるわけですよね。それは、全然根拠のないことではなくて、我々はそういうふうにつつ育つのです。しかも、大事なところは、周りに人がいないといけないということなのです。

こここのところが、非常に面白いところです。無論、我々はそういう分野を専門的に研究していたわけではないのですが、いろんな分野で個別に言われていることが、ジグソーパズルみたいにだんだん寄り集まってくると、哲学的な意味とはある意味違った、ある種の経験的な人間学のようなものが出来上がってくるのではないかと。こういうことを最初にきちり言ったのは、ノーベルト・エリアスです。1930年代ですね。エリアスは医学を専攻していましたが、哲学も勉強し、最終的には社会学の研究者になった人です。彼はなぜ哲学をやめたかという、ヘーニッヒスヴァルトという新カント派の先生と折が合わなかったからです。どの点かと言うと、「アプリアリ」も歴史的に形成されたエリアスは主張しました。これは絶対許せませんよね。哲学を知っている人だと分かると思うけれども。結局、彼はその先生のところで、ドクター論文までは書かせてもらったけれども、正教授になる見込みは全くなかった。まあ、医学などを勉強していたこともあって、プログラムとしては1930年代からあった。

彼はユダヤ系ドイツ人ですから、1940年代にはドイツを追われてしまって、ロンドンに亡命しました。しかも、ドイツから来たということで、ユダヤ人なのにイギリス政府から強制収容されてしまうという、過酷な運命をたどった人です。このような人が、プログラムとしてはだいたい1930年以降に、哲学ではない経験科学的な人間学のようなことを言っているわけです。ただ、当時は単なるプログラムだったのですが、特に1990年代、前世紀の終わりぐらいから、どうもジグソーパズルのピースがだんだん埋まってきているという印象を強くしています。

それは、我々のやっている言語相互行為研究の中でもそうです。はじめは言語学、特にチョムスキーなどの文法理論ですね。これで形式からの意味出力が、実際のコミュニケーションの中ではどのような機能を、解釈を受けて機能を果たすかという、形から働きへというのが、だいたい1980年代ぐらいまでで終わる。そういうものではなく、コミュニケーションの出来事というのは、固有のレベル、固有の次元、固有の出来事であって、そこ（形式・機能関連）に還元するわけにはいかない。要するに、「還元主義はだめだ。全体として捉えましょう」というのが、1980年代です。

日本では、土屋俊さんという哲学者・言語哲学者がいるのですが、この人が「カエサルのはカエサルに」、つまり発話行為理論、言語相互行為理論じゃなくて発話行為理論、スピーチアクト・

セオリーというのがありまして、これはもともとイギリスの言語哲学から、日常言語分析学派から出来てきた観念で、「だから、もう返しましょう。哲学のものは哲学に返しましょう」ということを言う。まあ、それが正しいと思います。無論、哲学、言語哲学としては、今でも発話行為理論というのはちゃんと成り立つと思うけれども、経験的、コミュニケーション言語の経験的研究としては、もう終わったという風に我々は考えています。だから、間接発話行為の問題も（もしご存知の方がいたら、ちょっと注釈しますが）、やっぱり疑似問題で、そういうことが1980年代にはあって、それで話はまた元に戻るのですが、「ではどういう風にすれば、事柄を事柄にふさわしいやり方で捉えることができるだろうか」ということになる。

そうですね・・・20年ぐらい前、1991、92年と、マンハイムにあるドイツ語研究所というところに、フンボルト財団の資金をもらって在外研究に行きました。その前後から、ヨハネス・シュヴィタラという研究者と、ずっと共同研究をやってきました。実に面白かったけれども、辛いこともありました。無論、こちらは日本語の説明をする、向こうはドイツ語の説明をするわけですよ。なんと言ったらいいか、ネイティブ・スピーカーだから、分からないことがぞろぞろ出てくる。「なんでそんなことを説明しなきゃならないのか。」分からないことが出てくるわけです。これが、お互いにとっての「壁」というか、境界というか。

そういうことをやりながら、この「資料」を見ていて、ちょっと忸怩たるものがあるのは、もう少しドイツ語の論文を書くべきだったなあと思っているからです。イタリア語のタイトルが挙がっていますが、これはシュヴィタラ氏の友達で、ポーロニャ大学の言語学の研究者がいて、「それは面白そうだから、くれよ」ということで、ドイツ語で刊行するやつの一部を「じゃあこれ。なんなら訳してもいいよ」という形で渡した。私はイタリア語がほとんどできなくて、観光客としてサバイブできる程度ですけれども、向こうの人が勝手に訳してくれました。仲間によると、内容は大丈夫だろうというのですが、もう少しやっぱりドイツ語で書くべきだったなあ、というのが反省点です。

「資料」にある「言語相互行為理論」の方は、自分でやっていたことを続けてやったという感じですが、「越境プロジェクト」に対しては、最初は必ずしも確信が握っていたわけではないですね。「地方都市」の「洋食」だなんて。これ、2つとも括弧がついています。なんかてらったような。しかも、本当のところ、論文と言えるかどうか、ちょっと？なんです。でも、「地方都市」にも「洋食」にも括弧がついているのは、ある意味で知識社会学的な視点を意識したということですね。「洋食とは何なのか」。実際、洋食はヨーロッパにはないですね。例えば、カレーのようなものは、ヨーロッパにあるはずがない。無論、「イギリスが植民地からもたらした唯一のまともなものである」という人もいますが。ただし、無論、肉は牛肉ではありませんよね、マトンです。しかも、日本と違って、ルーがベトベトになっていなくて、チュルンとしています。「洋食」じゃないです。無論、インドの料理です。

そういう意味で、食べ物に関しても、我々にとっての当たり前は、どこまで当たり前なのかということ徹底的にほじくり出す必要があるだろうということですね。思うのですが、我々は記号を食べている。これも、ちょっと面倒くさい話です。概念を食べているといったらいいのかな。つまり、カテゴリー化されている、すでにカテゴリー化されているから安心。

例えば、突然何の説明もなく、子羊の頭をダイヤモンドカッターで半分切って、脳みそも目も切る。それをオープンで焼いたものを「はい、どうぞ」って出されたら、どう思いますか？ サルデニアの人から見たら、「わあ、すごいごちそうだ！」ということになります。日本の人たちだ

と「何、これ!？」ということになるかもしれませんね(笑)。むき出しの現実というのは、いずれにせよ恐ろしい(笑)。だけど、これをいろいろ飾ってやって、「シチリア風○○。おひとり様3800円いただきます」と言われたら、「ああ、そんなもんだな」ということになる。つまり、すべての食べ物は、記号である。これは、日本の社会だけではありません。要するに、一般・原則論として、すべての食べ物は記号なのです。「記号」とは、正確に言うと、シンボルですね。つまり、社会的なシンボルであるという考え方があって、これが今の飲食生態論の根本である。

フランスで言うと、フランドランとかイタリアのモンタナーリとか、ドイツではバルレージウス、ちょっと前だと、トイテベルクという人たちがいて(この人は理系ですが)そういう知識社会学的な、社会的な意味作用・象徴作用みたいなものの観点から食べ物を、食べ物についての知識を研究するというのがあります。

「これはいかん」と思ったわけです。実は、私は車の運転をしないものですから、お二人の方の手助けを得て、高知県内をあっちゃこっちゃ廻ったり歩いたりしました。「昔、高知市にあった『明治』という古い日本式西洋料理店の最後の弟子の人が、店を開いている」と聞きつけたので、安芸市のあたりまで行ったこともありました。「こういうことをやっても、らちあかんかな、もう少しきっちり理論的に基礎づけた方がいいんじゃないか」ということで、次に「異文化理解における生活世界の諸関連——ドイツ語圏の飲食を中心に——」をテーマに掲げました。これが、そういう研究を続けていくには、どういう準備が必要かということの1つの案でした。

ちょうどその頃から、岩佐和幸先生と一緒に、「高知大学環食同源プロジェクト」にも参加してやっていました。これは不幸なプロジェクトでして、途中で高知大学と高知医科大学が合併したり、法人化があったり、学内のいろんな組織再編その他があって、残念ながらあまり持続しませんでした。それでも、その関連で、ドイツ語圏の調査に行きました。その成果として、「環境・飲食・『スローシティー』」という論考を2005年に発表しました。「スローフード」は、みなさんご存知ですよ。1986年に、イタリアでマクドナルドの進出に対抗して始まった、ある種の文化社会運動です。彼らの考えでは、食べ物のことだけを語ってはダメで、食べ物を入れる「容器物」としてのチッタ(街・都市)のことも考えなければいけない。

しかも、そこで言われる都市とは、日本みたいに何十万人都市のようなものではないです。イタリアやドイツでは、人口2千人でも都市です。例えば、自然エネルギーで有名なシェーナウという都市があります。「黒い森」の中にある都市で、エネルギーを全部自給して、グリーン電力の会社組織までつくって、10数万件の事業所に電力を供給するような大きなことをやっているところです。そこも、人口2千数百人で、シュタット(都市)です。1806年あたりで、シュタット・レヒトという都市の権利を獲得しています。だから、単なる人口と資本の集積と無関係に、「何が都市なのか」というのかについて言うと、もうちょっとずつこけるんですね。そういうのもひっくるめて、2004~06年あたりで、もう高知大学を退職されましたが、針谷順子先生という食物学が専門の教育学部の先生とか、岩佐和幸先生などと、4~5回行きましたかね、調査に行きました。無論、「チッタスロー」ですから、イタリアからはじまったわけですが、ドイツでもあつという間に広がるようになりました。私はイタリア語があまりできないので、「ドイツで調べて」ということで、最初にできた町と2番目にできた町まで行きました。

それが2004・05年の頃です。そのころから、先ほど言いましたが、生活形式、それから生活世界というものを、もう少しきっちりした捉え方はないかな、という風に考えてみました。皆さんの中に、例えばハーバーマスという名前をご存知の方がいるかと思いますが、ハーバーマスの生活世界

論とこれとは、ちょっと違います。ハーバーマスとか一般的な社会理論の場合は、「システム統合」といって、要するに国家とか何でもいいのですが、近代のいろんな制度、それによって統合することと、生活世界とを、切り離してしまいます。ところが、我々がやっているような言語相互行為、つまり言語学から出発した言語相互行為理論では、そこに差というか、ボーダーはないという考え方です。

少しずつ変異するいろんな編成のやり方があるだけです。その編成のやり方自体も、「パッと分けるんじゃないで、ちゃんと見ましょね」ということです。つまり、家庭の中にも制度があるし（婚姻も家庭も全部制度ですからね）、言語も制度です。そうすると、「制度の生態学」みたいなことをやらなきゃいけないだろう、ということもあって、我々のやり方で言うと、どっちかといえば切り離さないわけです。社会理論では、こう切り離すわけですね。そして「生活世界の植民地化」みたいなことを言うわけです。それが、現代資本主義の性格タイプの1つみたいな言い方をするわけです。

そうすると、「生活世界」のどこが違うかといえば、我々の立場では、生活形式・生活世界は、想定的には共有されていないといけないわけです。さっき言ったミラーニューロンの話じゃないですが、人間は常に複数で立ち現われるのが普通の状態であって、私ひとりから出発するなんていうのはダメです。哲学は別ですよ。そっちは、今、わたしの言いたいこと・やっていることじゃないですから。そうではなくて、社会とか人々の集まりとか言語とかは、共有で成り立つ。エリアスによると、最も社会的な出来事は何かというと、「言葉だ」と言うわけです。言葉というのは、同時に複数の人間がいなければあり得ない現象です。

「あなたはどのような言葉を習得しましたか。」「日本語です。」「何ですか。」「周りがしゃべっていたから。他に理由はありません。」これは、養老孟司のような人も（ちょっと困ったことをいう時もあるのですが）、この点に関しては面白いことを言っています。彼は、何と言っているかというところ、英語とか日本語とかドイツ語とかいう言語は、脳の中にないと。「え、じゃあどこにあるの?」と言ったら、「周りで起こっている社会的な現象に、脳は適応しているだけだ。」なるほどなって感じですね。チョムスキーが言っていることを否定しているわけではないです。むしろ逆に、チョムスキーなどが言っていることは、そういう適応のための普遍的な人間の言語能力の数理モデルだと考えればいいわけです。だから、それが英語の文法とか日本語の文法というところ、ちょっと面倒くさくなります。その現象は、社会という外の現象ですから。けれども、「外」とはいつても、私ひとりがあるわけじゃないです。「私」は、常に我々の形でしかいないということにして、今、神経心理学や神経生物学をやっている人たちからすれば、そう言わざるを得ない。人間の存在というのは、もともと複数で、常に複数で立ち現われるというのが、ノーベルト・エリアスの出発点です。

そういうところから、生活形式や生活世界論というのでも考えていきます。ちなみに、ここにも現象学などを研究されている人がいたら、ここではそういう問題設定じゃないわけです。例えば、「間主観性」というのは、まず独立した意識の主体を考えることが前提です。我々が言っているのは、「共主観性」ということで、つまり人間っていうのは、ほったらかしておいても、共にする・共にという姿で育つ、そういう存在であるという考え方です。しかも、神経心理学・神経生物学などの支持を得ていることだから、さっき言ったジグソーパズルが、だんだんピースがたくさん見つかってきて、そっちの方へ行くかなあというのが、今の考え方です。

なぜかというところ、実は、我々がやっていた研究とも関連しています。例えば、日本語の談話、会話を、0.1秒くらいの精度で、トランスクリプトします。で、特に面白いのが、いわゆる相槌現象

です。英語やドイツ語にもあるタイプの相槌ですよ、つまり Go ahead (私は今のところ、お前を邪魔する気はないから続けろ) っていうタイプの相槌です。ヨーロッパ言語はそうですし、日本語にもありますが、我々が発見したのは、そうじゃないです。これは、「3歩形式 4歩形式 5歩形式」と言います。例えば、しゃべっていて「そうだよね」「うん」「ね」、3歩です。「そうだよね・うん・ね」1・2・3。こういうのが最大7歩くらいまでいきます。何の新規情報の提示もないわけですね。この人たちはいったい何をしているのでしょうか。これはまだ、世界中で誰もあまり指摘していないのではないかと思うのですが。

このトランスクリプション(録音からの転写テキスト)を研究仲間に見せたら、「おい、この連中は楽譜を見ながらやっているのか」と言うのですね。「え、どういうこと?」「こんなにぴちっと相手とコーディネイトできるって、いったいどうやってこんなことができるんだ。16分音符で書かれた楽譜を見ながらやってるのか?」と言われました。つまり、「たたていた・たたててい」っていうことで、そういうふうに見えてしまう。逆に「何でだ」と聞いたたら、「我々はこんなことやらん」というわけです。で、こちらが「ええーっ」ということになる。「じゃあ、もういっぺん調べてみましょう」ということになって、ドイツ語の膨大なトランスクリプションを調べたら、確かにないですね、この「ね・うん・ね」というタイプは。かろうじて見つかるものには、ちゃんと意味があります。「再確認したい」それで「肯定したい」、でもう一回こっちも「それだったら言うぞ」という形で、それぞれターンと言うのですが、その発言単位に談話の新しい局面を作り出す力がある。そういうものだったら、ドイツ語にも英語にもあります。

つまり、日本語会話では、本来、そこで何かが新規に出るのではない、要するにこれは共同参加という現象です。「ひとつの出来事に、みんなで一緒になって参加しているよね」という。なぜ、そんなにわずかの隙間にきれいに入ってこれるかということ、相手が何をすることがもう予測できているし、予測できているどころじゃなくて確信しているんです。(講演者が最寄りの聴講者とやり取りして)ね、ほら、こういうことなんです。これは日本語だけじゃないですけども、少なくとも我々が調査した対象が、英語、ドイツ語、フランス語、日本語ですから、そういうのは「参加者間指向表現」といいますが、いわゆる相槌ではないです。でも、非常に独特に日本語的な現象です。無論、日本語だけじゃないですが。

高橋先生、中国語にはこういうのは少ないと聞きましたが、本当ですか。(高橋先生「それは知らなかったです。’)いやいや、私は中国語ができないので、それができる人に言わせると、日本語ではやたら多い、英語ではまあまあ、中国語は非常に少ないそうです。私には、これは全然検証できませんから、「へーっ」と言うしかないです。つまり、「共同の出来事に参加する時に、どういう風に事が進んでいけば、それは共同の出来事なのか」ということについての根本的なイメージが違うわけです。いや、どちらが良いとか悪いとかではないです。

では、「今、この状況は共同参加の状況だよ」というのがどこで確保されるか、というのは、それぞれの人々によってずいぶん違うんですね。例えば、ドイツ語の話者で比較的多いのは、相手の目をちゃんと見ているかどうか、というようなことです。例えば、お母さんが娘の長い前髪を非難するときに、「お前の目が捉えられないじゃないか。だから切りなさい!」というような、そういう非難の仕方をするというのがあります。

こういうのもひっくるめて、その人たちにとって、毎日の暮らしがいつもと同じように、友達は友達だし、親は親だし、学校に行ったら普通に生活が進んでいく。バスに乗るときはこうやって支払う。そういう制度までひっくるめて、要するにこの生活の世界をつくりあげているいろんな要素

がある。無論、一番典型的には、戦争などがあれば、国家というものが理不尽にバリバリと生活の中へ関与してくるわけですが、人間の社会というのは、そういう側面も当然考えなきゃいけないけれども、当面、昨日と今日は同じだといった時に、いったい何がそこで起こっているのかということ、根底的に根本的に考えると、面白いなあ、ということですね。

というのも、我々もよくドイツに（何回行ったかなあ、もう覚えていませんが）20回くらいは行ったと思います。全部で3年ちょっと住んだことになりますので、行ったり来たりであんまり長くはないですよ。そうすると、その度にやっぱりスイッチの切り替えが起こっている感じがします。時々困るのは、しゃべっている言葉は日本語なのに、そういう対応のストラテジーがドイツ語・英語だったら何が起これると思いますか。夫婦喧嘩が起きます。これは悲惨な職業病です。つらいところがあります。逆に、「あー、日本人やっちゃったー」というのもあるんですよ。だから、逆に自分自身をモルモットにして観察対象にすると、右往左往しているところが、またそれはそれで面白いということになります。

社会的な自己同一性と相関する交流様式

そろそろ1時間近くになるので、最後に1つだけ、その実例をお見せします。

だいたい2010年代ですね、ここ3～5年くらいは、完全にうまくいっているわけじゃないですが、今言ったような生活形式や生活世界、飲食生態までひっくるめて、音楽や何かも全部入れて考えて、全体を（コミュニケーションと一緒にするわけじゃないですが）、それぞれの場・それぞれの活動の場があって、そういうものが全体としてどういう風に配置されているのかという視点ですね。あるタイプの人間学みたいなものですが、哲学ではなくてそういうものができたらいいなと思っています。これまでは一般書みたいなものを書いてきましたが、このところをまだ本にはしていません。相互行為と飲食生態みたいなものを何とか統一的に枠組を設定して、本にできたらいいなと思っています。

ということで、ちょっと前を見てください [パワーポイントによる提示]。これは、去年の末に日本コミュニケーション学会支部でやった講演内容です。「都市のコミュニケーション研究」というプロジェクトがあります。その本を全部揃えているのは、日本の図書館の中でもそんなにたくさんありません。今、画面に表示しているのは、私が買ったもので、高かったんです。全4巻で10万円もしまして、泣きの涙で買いました。これを全部揃えてる大学があんまりないですし、読んだ人はやはりいない。ドイツ人の友人も辟易しています。全部で2千数百ページの本ですから。

とにかく、言語研究者がエスノグラフィーをやったもので、ものすごく膨大なコーパスがあります。それから、アメリカ側から見ていくと、社会文化的に相対化してエスノグラフィーとエスノメソドロジーとを融合させたというものです。興味がある人は、そういうことです。言語表現・言語行為、いろんな談話の類型、交流様式ですね。ソーシャルスタイルについては、またあとで説明します。そうしたスタイルが統一的で一貫していることが分かった。これは何の意味があるのか、については後でやりますが、副次的には、女性の言語行動に関する定型化されたステレオタイプを否定するような観察がたくさん紹介されたというようなことがあります。

これは、ジョン・ガンパースとウィリアム・ラボフのおかげで生き残ったプロジェクトです。ガンパースは、毎年交流して、最後はとうとう論文を書いたということです。興味ある人だけでいいですが、ラボフは「自分のコリレイション・モデルをひっこめてもいい」とまで言ったそうです。

このプロジェクトが成功した暁には、自分のモデルはひっこめてもいいとまで言った。簡単に言うと、ラボフは、社会学的データは社会学的データ、言語学的データは言語学的データでコリレーションを探しましょうということです。一方は現実自体がインタラクションのプロセスを通じて段階的に作り出されて生成し、その手順が結局社会言語学的なバリエーションと関係するというモデルですね。

手芸グループ、文学グループ、政治グループという、典型的にドイツの伝統的な労働者階層、それから伝統的な教養市民、アッパーミドルですね、それからそういう体制からの解放を願っている女性の政治グループで、SPD（エスペーデー：ドイツ社会民主党）の組織下の政治グループなど、都合6つのグループの調査をやったわけです。

（スライドを提示）これは、現代の西ヨーロッパの生活世界類型です。フランス語で「ミリュール」と言ったりしますが、これが1000年前から続いている伝統的な田舎の暮らしで、羊飼いかかが3%くらいで、あとが典型的な中流層、典型的な労働者階層、典型的なコンサバティブな上流です。これが右へいくほど、時間の変化によって、戦後いろんなタイプの（例えば、カウンターカルチャー・タイプとか）が出てきます。それから、現代のメインストリームは、中流層を広く覆っています。それから、ポストモダンな連中もいるということで、全部で10いくつの棲み分けがあります。棲み分けのニッシュのあり方が、こんな風になっているのですね。これもすでに我々にとっては「ヘー」という感じですよ。

中心概念は、ソーシャルワールド、それからソーシャルスタイル、それからコミュニケイティブ・ソーシャルスタイルといいます。簡単に言うと、これらは社会世界や社会様式とか言うのはダメなんです。具体的には交流世界・交流様式の事です。交流世界は、生活世界の一部で、相互行為によってのみ形成される。「ソーシャル」とは、全体社会の意味ではなくて、ラテン語語源のソキエタスに近いような、人々が集まっている状態として、しかも見渡しがきくものです。認知科学的に言うと、1人の人間がなんとかお付き合いできる範囲とは、顔をちゃんと識別できる範囲で、人との関係を調節できる人数は150名くらいだそうです。ですから、それが我々にとっての第一次的な生活世界のだいたいの規模ということになると思います。

交流様式とは何かと言いますと、人を取り巻くいろんな世界の環境、文化やイデオロギーとのやり取り・取り組みを通じて、その中から形成されてくる。あとは、会話事象の中にそれがどういう風に現れるかということですね、話題、噂ネタ、噂話、怒っているか皮肉かおもしろがっているか。話者がどういう風に交代するか。同意する時／同意しない時はどういう表現があるか。「みんな同じだよ」ということを明示する時には、どのような方法が使われるか。ストラテジーはあるか。紛争はどうやって解決されるか、避けられるか。論弁、アーギュメンテーションですよ、それにどんな役割があるか。その談話の実現形は議論・ディスカッションですよ、議論はどのようににその人たちの中で取り扱われるかとか、こういうことですね。

これは、関係がどうやって調整されるか。どういう類型が優先されるか。それから社会的な自己同一性、つまり私はどこの者であって、さっき言った、これ（図表）のどこに私はいるのか。それがどんな風に表現されるかということです。細かなところはぶっ飛ばします。それで、手芸グループは60～70歳くらいの下町のおば（あ）ちゃんたちが、手芸グループで集まって、いろんなお話ししながらこうやるわけです。簡単にいうと、「この人たちは、こういうようなコミュニケーションのやり方をして、こういう風なやり方にはこんな特徴がありますよ」というわけですね。どういうところに目をつけるかというのが、説明されているわけです。

例えば、手芸グループの人たちのスタイルの特徴は、やっぱり貧しい人たちです。その社会経済的条件にかなり規定されている。彼らは伝統的な労働者の価値意識があって、それから連帯意識、それから「その地域の中の自分」という自己意識、率直さ、誠実さ、「困っている人には連帯しましょう」、「中身より見せかけなんていうのはダメだよ」、「他人の親切を悪用しちゃダメ」というような、割と堅気な庶民というイメージですよ。

一方で、政治グループは、戦闘的な人たちです。文学グループはお上品な人たち。これはいろいろ対比がありますが、最終的に両方のグループのつき合い方の根本的な原理は何かというと、政治グループは、我々は自分を押し通す、戦うという感じですね。お上品グループ、文学グループは、「我々は平静を保ちます」、美しいものを好み、互いに用心深くつき合う、というのが根本原理だということです。

次に事例ですが、さっき言った「他人の善意を悪用するな」ということに抵触する人たちが出てきたわけですね。つまり、他の人が持ってきたケーキやなんかを、どんどん食べて何も払わない、カンパしないというような人たちについて、どういうことが起こるか。自分人間・イッシュメンシュ（これはマンハイム語ですから、アイン・イッヒ・メンシュ [ich-mensch] のことです）、要するにあいつは自分のことしか考えていないといって非難する。それで、どういう風な対処法が行われるかということ、コーヒーの会をして、その時に「私は喜んでケーキを寄付する。当然だ。けれども、そのケーキは今後は売ることになる。あいつが、恥ずかしげもなく食べていってしまう人が、5個食べたら5マルク料金箱に入れる。それが私の提案だよ」と。これはある意味で、この話者にとっては残念なことです。「こんなことをしなきゃいけないなんて、下町の仁義が廃ってしまう」というような社会的な意味を持っているわけです。

それで、そういうご婦人たちの交流様式・ソーシャルスタイルというのは、いったいどういう働きをしているのか。小集団の中で発展し、習熟し、ほかの場面にも適応できるような社会的な、ソーシャル・アイデンティティのリソースです。そういう様式が広まれば、いろんな場面を自分にとってなじみのある環境にすることができる。「自分はこの町の者だぞ。ここで言うべきことがあるんだ」という、そういう権能・能力を作ることができる。そして「自分のやっていることは真っ当なことだ。ちゃんとしたことだ」という、そういう表現能力の象徴として、そういうスタイルが機能する。「自分のやっていることはちゃんと根拠があって、理由があることだ。私がここでこうやっているのは、真正で、オーセンチックである」ということを象徴することができる。

つまり、その地域の固有の人間であり、そこではその出来事の当事者であることを象徴するというこのスタイルによって、社会的資源をめぐる紛争への参加において効果的でありうる。例えば、集会所を使う時に、「それは自分たちが独占的に使うんだ」という時に、こういうスタイルが象徴的に働くようなことになるということです。

こういう様式・ソーシャルスタイルが、どういう社会な意味を最終的に持つかということ、住民は自分の文化を創造したことになる。社会的・文化的自立というのは、政治的な力、ポテンシャルも持っている。その作業は、都市社会のいろんな関係の中で自分たちが生き残るのに、そこで通用するようにやり抜くという力を獲得する努力と結びついている。要するに、さっき言ったように、追い出される人もいるわけですね。そして、大きな苦勞で獲得される地位や役割の相互適応、つまり、「いつもあいつは提案する」「どちらかということこの人はそうではない」といった関係です。当事者にとって社会的な条件に適応し、交流世界・ソーシャルワールドに居場所を見つけたことを意味するわけです。そして、それがその人たちにとっての誇りと、自己に対する自己評価の基になってい

るということです。

ただし、ここも面白いところですが、都市では(大きさはどうでもいいですが)、ローカルなソーシャルワールド・交流世界の性格とは何かというと、家庭の非常に個人的なプライベートな領域と匿名的な公共空間の中間領域、社会学ではこれが「サードセクター」なんですね。本当は、これが第三セクターです。けれども、行政とか政策学の方が「第三セクター」の言葉をかっぱらってしまったので、日本の社会学はしょうがないから「サードセクター」と呼んでいます。要するに、中間領域です。この言葉の方が分かりやすいです。中間領域、家庭と、いちばんうるさいところでは国家機構のあいだにどんなタイプの交流世界があるか。二次集団、三次集団などです。

これは、ヨーロッパの方が非常によく発達しています。例えば、マンハイムの事例で、いい形で適応するとどうなるかということ、個々の家庭から、つまり全くプライベートな世界から立ち出てくる人たちは、相互行為を通じて固有のスタイルを形成するようなグループを作る。ソーシャルワールドを作って維持する。それは、日本で言うNPOの援助に依っている。NPOは、日本でもそうですが、自発・自治・無償の原則の上に成り立っている活動ですが、実はその人たちが世話して、最初はできたということです。そして、このマンハイムの登録協会には、学生も入っています。登録協会自体は、非営利です。

そして、その協会の活動自体が、今度はマンハイム市当局の援助するところとなっている。どうということかということ、再開発のために取り壊すはずだった建物を取り壊さずに、この活動、手芸グループだとか、読書グループだとか、子供の宿題を見るとか、トルコ系の女の人たちが集まる場所を提供するとか、そういう大きなコミュニティの集会の場所として市が提供したんですね。そういうことで、いろんなレベルでの、市までいくと地方行政のレベルですが、こういう風に社会の編成・構成というものを考える上でいろいろなアспектもあるけれども、おそらくヨーロッパ、イタリアもドイツもポーランドもおそらくこういう仕組みが幅広く成り立っているだろうなと思います。英語の分野でいうと、アソシエーションにあたるころなのですが、ヨーロッパの社会に広くこういう仕組みが見られるということではめたいと思います。

だいたい2300ページを読んで、考えることはどういうことかということ、プラスのポイントというのは相互行為様式、インタラクショナルスタイルとしてのソーシャルスタイルをですね、生活世界における社会的自己同一性、つまりソーシャル・アイデンティティですが、それらの関連を膨大な談話資料の分析で示した。これはもう著しい成果です。けれども、内在的な疑問というのは、先ほどの棲み分けの図がありましたけれども、では家族や家庭から始まる社会化や発達のプロセス、社会化過程の中での付き合い方、つまり相互行為様式の特性と、そういう任意のグループのソーシャルスタイルとの関連は、どうなっているのでしょうか。それについては、ここでは言っていないです。

例えば、議論というのが(これはドイツ語の研究ですが、どこの分野でもそうですけれども)、その人々にとっては当たり前だから、もうそれ以上は分析しないけれども、議論というのはどこで学ばれるかというのが問題です。これは言っていない。我々が外から見たらどう見えるか、ということですね。

つまり、こういう付き合い方の様式、スタイル、ソーシャルスタイル、それからソーシャル・アイデンティティ、それからそのグループへの帰属の関連付けがですね、ほぼ無前提です。これは、この研究を高く評価する他の社会言語学者の書評を読んでみても、それからこの研究の後で、社会言語学関係で、この研究があることを前提に書かれた入門書を読んでみても、こういう生活世界あるいはソーシャルワールドに対する帰属と、それが形成するスタイルというものの関係は、ほぼ無

前提に想定されている。これは、我々から見ると「そうかなあ。ちょっとそれは、あなた方にとってはそうかもしれないけれど、それは無前提ではないですよね。」というところが、今ひとつの面白い部分ですね。素朴な疑問です。

では、日本の社会はどうか。生活世界、交流世界の差異というのは、どういう風に作り出され、維持され、あるいはメタコミュニケーションとして、「あいつらはどうこうだ」とか「私たちは、それはよう言わん」とか、そういうやつですよ。どうやってそれが表現されるか。それから棲み分けというようなもの、さっき言ったようなもの考えていいのかどうか。ヨーロッパの場合は、これはもう社会学者たちが言っていることですから、そんなにでたらめではなさそうなんです。そして、これはヨーロッパ全体に適用できると書いてあります。それで、我々からは、そういう棲み分けというようなことを、生活世界のいろんな差異、バリエーション、これをどう考えるか。それから、交流様式、付き合い方です。ソーシャルスタイル、付き合い方の差異というものは、例えば日本の社会の中ではどういう風に現れるのか。いずれにせよ不明確です。こういう社会言語学的研究はあまりないですね。

例えば、上司なのか部下なのか、どういうタイプの職種なのかということが多分問題になってくるだろうと思います。この辺は、私の調べ方が悪いのかも知れませんが、もう少し面白い研究があれば、ぜひ見てみたいと思います。どことは言いませんが、四国のある大学の社会学の先生たちが、さっきのヨーロッパの棲み分けモデルをそのまま東京に適用しているのですね。これは、ちょっといくらなんでも社会学的研究としてはあまりに無用心じゃないかなと思います。選挙の時の投票行動のあり方と、それからそういう棲み分け、ミリューの差異ってものを関連させて、大丈夫かなあという感じがしますね。ちょっと無理じゃないかなあ。東京なら東京という地域の社会構成を、もうちょっと慎重に考えてほしいなという気がします。いずれにせよ不明確です。

それから、歴史的にみれば、特に近代化のプロセスの中で、こういうことはどうなったのかということについては、あまりよく分かりません。それから、特にジェンダーの関連ではどうなっているのか。これも、どうもあまりわからない。単に、いわゆる女言葉とか言語表現上の形式の選択というところでは論がありますが、そうではなくて、もう少し生活世界・生活形式それ自体の構成を考えた上で、ジェンダー概念というのはどういう風にとらえられるのかということも、ひとつ問題かなと思っています。

もう時間がありませんが、ただ「彼ら」なんてつき離して言いますけど、彼らが当たり前だと思っていること、あの人たちにとっては当たり前、社会のいろんな出来事を理解する上でそんなものはいちいち言わなくていいという一つの要因だけを見せます。ちょっと古い統計ですが、ドイツ連邦共和国の人口8200万人のうち、(14歳以上ですが) 2340万人が、無償の社会活動をしています。成人では、3人に1人がやっています。これを生産活動として換算すると、GDPの数パーセント、当時(2004年)で、170億ユーロ、今のレートで2兆何千億円かの生産を、ボランティアとして社会に還元しているということです。これは民主主義のひとつのコストです。

それで、登録された団体っていうのが先ほどありましたね。2001年55万団体、10年ほど後の2012年で60万団体です。日本のNPOは、2012年で4万団体です。人口補正して25対1ぐらいです。それで、もう最近はお無沙汰していますが、ヴァルトキルヒという人口2万人の市に240団体、ヘアスブルック(これも市ですが)では、1万2千人の人口で150団体あります。これは登録されている団体だけです。では、登録されていない任意団体はどれぐらいあるのかということ、これは分かりませんが、例えばスイスは、いろんな便宜を受けても団体登録の義務がない、ドイツよりも少し

融通の利く制度なので、登録された団体が7600団体ですが、実際の団体数は15万~20万団体あるだろうと言われています。ということは、820万人で15万団体というのを8200万人にそのまま単純に平行移動させれば、150万団体ぐらいの任意団体があるということです。

これはドイツだけの話ではありません。ドイツ連邦共和国は、ヨーロッパの中ではあまり熱心じゃない、中くらいの参加率です。どこが熱心かという、もうちょっと小さな国ですね。デンマークとか、オランダとか、スイスとかです。こういったところの方が熱心なようです。ドイツでも、地域の人口が減るほど、人口当たりの数は増えるという傾向があります。今の傾向としては、参加者数は減るのに団体数は増える。つまりどんどんこう特化していつているということです。こういう傾向がある。これがドイツだけじゃなくてヨーロッパ全体における彼らの住んでいる世界についての彼らの理解の前提のひとつだということです。これの調査については、日本でもまだあまり研究されていませんが、大都市プレーメンを調査した人はいます。

ですから、中間領域の重要性というのは、もうちょっと注目すべきです。つまり、ヨーロッパの社会が全部個人主義で成り立っているというのは幻想です。1に家庭、2に地域で、3・4がなく5が職場くらいのもですね。普通の人々は、まずはとにかく今言ったような任意の団体や登録された協会、その他に出入りしている。仕事は熱心ではないけれど、そっちの方で一生懸命にがんばっているような人のことをフェラインスマイヤー（愛好会のマイヤーさん）と言ったりして、からかったりします。アメリカはこれが崩壊しました。パットナムの研究があって、“bowling alone”、さみしいボーリングですね。草の根がダメになるプロセスについて、アメリカの社会学者が克明に記述していますから、興味がある人は読んでみてください。ですから、この点は、アメリカとヨーロッパは随分違います。ヨーロッパの方はむしろ増える傾向です。ただし、総参加者の数はそんなに増えないけれども、団体数だけ増えるということは、それで特化が行われているとういことなのかな、と解釈しています。

ついでに、都市というのは、人口の多少ではなくて、一定の質と量で政治・経済や社会・文化、その他の機能を果たしていれば都市ですから、シェーナウは人口2千2~3百人でも1806年に都市の権利が認定されています。歴史的な来歴が明確で、さっき言った交流世界、ソーシャルワールドのネットワークが多重にあって、そのために集会所が、酒場が必要なんですね。日本は反対です。飲み屋があったらそこに集まる。逆ですね。集まるべき場所が必要だから作るわけです。

イタリアにチルコロ運動というのがあって、これはサークルという英語と語源は同じですが、農村や都市の文化運動、労働組合の運動です。例えば、農村が山間にあるとして、「うちにはバールがないからぜひ作ってほしい」と言ったら、調査に行って、どういう条件だったらその村にバールが設置できるかを調査して、「じゃあひとり1週間に1回だけでいいから出てきてくれ。それで廻せば飲み屋はなんとかなる。」となります。バールにもいろんな段階があって、ほとんど食べ物を出さない、出来合いのものしか出しちゃいけないバール、それから調理して出していいバールまで、何段階かあります。そういう形でとにかく集まる場所がある。集まる場所がなければ、コミュニティが成り立たない。そういう考え方です。

それが全体として社会のコミュニケーション循環を作る。つまり飲み屋の議論が最終的にはどこかで世論の形成へとつながるとい、そういうのをコミュニケーション循環といいます。規模やレベルを問わずにそういう中間領域、都市の規模の大小にかかわらずそういう仕組みがあって回るようです。

それで、究極の問いはということかということ、社会的な自己同一性と相関する交流様式という

のは、意図的、つまり「俺たちはこうこうだ」「あいつらはこうこうだ」という対比を前提とするのですが、我々が普通にしゃべっていて当たり前だと思う、英語の話者がしゃべっていて当たり前だと思う、その当たり前というのは、もっと面倒くさい。自覚が困難で、それ自体としての協調様式みたいなもので成り立っていて、これを相対化するのは非常に難しい。自分で自分の座っている枝を切り落としたくないですから。それで今後、こういうところまでいければ、面白いかなと思っています。

異社会文化間の相互理解というのを思うに、「あの人たち」の自己理解というのは、そのすべての前提を明示しているわけではないし、できない。そういうタイプの全体的理解であって、我々側の理解の困難は、あの人たちにとってあらかじめ理解されているはずの全体というものが、我々には分からない。だから、方法的に再構成するしかない。これはお互い様ですね。

それで、文化人類学者、フランスの今ナンバーワンみたいですが、ゴドリエさんという人が、人間の社会を対象とする時には他者の社会的・歴史的な他者性、異質性というのは絶対的なものじゃない、常に相対的なものだから、ある条件の下で解釈可能だし、理解可能だと言っています。人間が周りの世界に働きかけて、その世界の中にある自分たち自身をどういう風に解釈するか。それから世界と、彼ら自身に対して働きかけるためにその人たちが作り出したものは、そこで育たなかった他の人にとっても理解可能であると。大乘仏教だろうとマルクス主義だろうとなんであれ、その思想のなかに含まれるいろんな原則などを実際に実行しなくても理解することはできる。これが、要するに人間の社会を対象にする研究の基盤であると大将はいうのですが、まあそうかなあというところですね。これが、今のところ、2015年段階で考えていることです。

あと10分ですかね。これくらいにしますが、これが何かの成果になるかどうかは分かりません。成果を発表する価値があるかどうかというのも分からないというところですね。もし何か、ご質問があれば、ぜひどうぞ。

3 質疑応答

【司会】

オフィシャルで10分から15分くらいの質疑応答の時間をとって、そこでいったんしめた後に、まだ丸井先生にはしばらく残って下さると思いますので、インフォーマルなご歓談をしていただければと思います。まずは丸井先生からお話いただいた内容について、ちょっと10分ほどオフィシャルな質疑応答の時間をとりたいと思いますので、どなたからでも、どういった内容からでもご質問等あればと思うのですが、いかがでしょうか。

【質問者】

国際社会コミュニケーション学科の岩佐光広です。今日は非常におもしろく聞かせていただきました。丸井先生とは、実は退職されてからも、週に1回ぐらい、さっきでていたサードプレイスでお会いする機会があって、なんとなく久しぶりな感じもせず、とはいえそういうところで話すとはまた違うお話を聞かせていただいて、すごく興味をもって聞かせていただきました。それでちょっと聞いていてすごくおもしろいなと思ったのが、最後の話で、言語コミュニケーションをやっている、対話分析のヒストグラフを一緒にやっていくっていう話の中での、「棲み分け」とい

う話でした。そこで想定されていた話は、福祉だったと思います。それで、僕は日本という風というと（日本という枠でいったん考えるという方法にするわけなんですけれども）、プロジェクトの話になるんですが、高知ではどういう棲み分けがあるのだろうか。ちょっと聞いていて、どんな感じなんだろうなと思いました。

そのようなことを考えると、あそこに山の人と海の人とか、川を生きたりする人とか、都市、あと西と東でちょっと違うとか、そういう環境的な話がそこにちょっと関与しているんじゃないかなと、最初から聞いていて気になったりしました。丸井先生は、高知のいろんなところでうろろろされて、いろんな方とお会いしたりすることとかあると思いますので、体系的なお話じゃなくて、本当に個人のイメージでいいんですが、高知における棲み分けみたいなのを考えるとしたら、どんなことをやってみる必要があるのか。「こんなプロジェクトができたならおもしろそうだな」とか、アイデアというかイメージというか、手がかりをお聞かせいただきたいです。

【丸井先生】

日本の場合は、ひとつ難しいのは、近代化プロセスでいろんなものがいろんな風に訳がわからず変容していますよね。それをどういうふうに捉えるかというのが、非常に難しいですね。無論、ソシエテ社から出ている『西と東が語る日本の〇〇』のようなものがあって、あれは古いものですけど、ああいうのを見ると、近代化以前の基層文化的な何か、例えばお酢の消費量なんていうのがあるんだな、というのはわかるんですが、ただそれは現在保たれていないようなものなんですね。だから、この社会のいろんなバリエーション・ダイバーシティはどこから発生したのかということは、近代化プロセスと無関係には考えられない。

都市化の現象はどういうふうに考えるかについては、日本とヨーロッパは都市というものに対する考え方が根本的に違いますから、ここのところは社会学的な対比ができると思いますね。人口2千人でも都市なんですよ。この辺はどういうものか、非常に面白い。それから大都市が持っている意味合いも、またちょっと違いますよね。日本の場合は、東京が近代化プロセスのいろんな実験場というか、展示場ですよ。ところが、ヨーロッパは、必ずしもそういう風にはいかない。無論、パリとかベルリンとか、いくつかの中心はあるわけですが、メトロポリスというか、それに相当するところとそうでないところとの間の力関係はどうなってるのかというのは、私は社会学者じゃないので、それに関してはあまり答えられません。けれども、おそらく何かパターンがあるんじゃないのかなあ、とは思います。

それから、質問でおもしろいのは、フランスで起こっている変化がおもしろいんですよ。昔は非常にステレオタイプ的に言うと、パリだけが花で、あとはその養分だからみんな、なんかっていうところがあったんですが、1980年代か70年代かな、地方行政改革（誰か社会科学の人で詳しい人いませんかね）が始まるんですね。それで、日本と違って合併合併じゃなくて、村は村で残して、あとは機能的に合従連衡するというタイプの脱中央集権みたいなことをやるプロセスです。もうひとつは、さっき言ったスローフード運動は、フランスにはほとんど波及しないんです。なぜかという、「そんなものは、うちではずっと前からやっているから、特にいらない」。それで、イタリアがやるから「じゃあやらない」っていうのは冗談ですけど。要するに、その必要を感じられないというのは、1980年代くらいからそうなのですが、地域の食事文化っていうのは非常に見直されてきて、パリだけという時代が終わるんです。1990年代に特徴的な出来事がありまして、パリのナンバーワン三ツ星レストランが、豚肉を出すようになるんですね。フランスでは「金を出して、時間

作ってレストランまで行って、豚肉なんかわざわざ食べたくねえよ」というような感じで、生ハム以外は豚肉を金とって出すようなレストランはなかった。ちゃんとしたところですよ。それが、「豚肉大王様の何とか」のような、こっぴどかしい名前を付けて、1990年代半ばに提供するようになった。つまり、これは農村的なもの・田舎が、都市的なものと同格になったということです。それを紹介したフランスをフィールドにする社会学の人がそう言っているんですが、そういうプロセスがあるということです。そうすると、その地域（この場合は国が単位になるかもしれないけれど）、その中でその人たちが、その世界をどういうふうに解釈しているかということです。

だから、高知に関していうと、何がボーダーなのか、境目なのかということ、調査すると、何か出てくるかもしれないですよ。つまり、どこが目印なのか。だけど、それだってよそから来た人にとっての目印と、ずっとここに住んでいる人とは違いますよね。ひとつのポイントは、教育や職業上の体験として、大都市に住んだことがあるかないか。そんなことも、関係があるかもしれません。私にもまだちょっとわからないところがありますが、何が目印として通用するのかを調査するというのは、有り得ると思います。

【司 会】

もうお一方くらい、いかがでしょうか。

【質問者】

サードセクターがある場所に、アルコールは絶対必要でしょうか。

【丸井先生】

いやいや、そんなことないですね。例えば、彼らがそういうのを全然好まないということだってあります。例えば、イスラム圏みたいに、アルコールを公然と飲むことが憚られるようなところだったら、むろん男だけなんですけど水煙草とか、それから強いコーヒーとか、何かそういうような仕掛けがあります。それは、それぞれの集団ごとに、いろんな生活、それこそ生活形式がありうると思うんですね。

【質問者】

イスラム形式、イスラムの方では、普通に地方のつながりとかあるんですか。

【丸井先生】

分かりません。調べたことがないから、知りません。何かおもしろいのがあったら、教えてください。

例えば、高知の場合は、どういう風なことが起こるか。例えば、津野町の旧東津野村の事例ですが、飲み屋はあまりありませんので、そうするとどうすると思いますか。個人のお家が、順番にやるんです。つまり小規模の「おきゃく」みたいなことをです。おきゃくというと、今ではすっかり観光化されてしょうもないものになってますけれども、そうではなくて、ネイティブな姿というのはあるはずなんです。そういう調査は、まだ行われていないですから、ここもひとつ卒論で調査研究をやるんじゃないかなと思います。つまり、観光化されていない姿で、「おきゃく」とは一体何なのかということです。例えば、それが他の集まり、観光化されていない、マニピュレイトさ

れていない「おきゃく」というものと、高知という地域で人々が集うという事柄全般のなかでどういう位置づけになるか、とかね。こういうのは面白いと思う。「おきゃく」も飲むんですけども、飲まずに集まるということも、あると思いますね。お大師様、大師堂に集まってどうたらこうたら、一緒に作業しながらとか。これもいろんな伝統的なタイプがあると思うんですが。やっぱり、これもエスノグラフィーですかね。

【司会】

いかがでしょうか。これもせっかくの機会なので、普段人文学部の中で交流されていない方からも、お一方ぐらいいかがでしょうか。

【質問者】

人間文化学科の吉尾です。先生からはこういう話を初めて聞いたので、より鮮烈な印象を受けています。少し教えていただきたいのは、先生はいろいろな研究のなかで、差異と同一とか、そうしたものがいろいろクロスされて出てきているというお話をされました。例えば、人と人との中で違うことと似ていることとかについて、そのように見えるものの土台みたいなものがあるんじゃないかと。僕が先生のお話を聞いて勉強したと思っているんですが、例えば歴史か、思想・宗教とか、そのようなものは、今日の先生のお話のどこに関わっているのか。逆に言うと、先生のお話が、例えば歴史で見えない、あるいはそういう観点だけでは見えないものを今日話されていると思うんですが、今日のお話の土台みたいなものがあれば、お聞かせください。同じようなものの違いとか、そうしたものが出てくる土台というものについて、先生が何か考えているものがあれば、教えていただきたいです。

【丸井先生】

多分私の理解が間違いでなければ、こういうことだと思うんです。1つは、人間だったらみんな同じように持っているはずのある種の性質があって、なるべくいろんな条件なしに単純なプロトタイプ・人間のあり方みたいなものを考えて、それから例えば（本当言うとむちゃくちゃ難しいのですが）、どうやって世界中のいろんな人々のグループのバリエーションが発生するのかということ（本来は人類学の問題だと思うんですけど）、我々としてはそこまで遡って見ておかないと、理論を組み立てる上ではよくないのかなという気がしています。それは何かといえば、人間というのはもともと複数で立ち現われる存在であって、ある種の共有性・共同性を前提にしているということですね。これをまず出発点にすることができると思うんですね。例の有名なホップスの「人は人に対してオオカミだ」なんていう部分がありますが、そのすぐ前で「個人個人の付き合いでは、人は人に対してまるで神のごとくである」と書いてあります。だからある意味で、自分たちのちっちゃなある種のプロトタイプ的な生活世界の中では、共有とか共同性が成り立っていると思うんですね。けれども、それがどこからそうでなくなるのか。これは、例えば、人類学的にゴドリエが言っているように、そういう人々の集まりが、我々が言うところの社会になる条件というのは何かということなんですね。部族はまだ我々が言うところの社会じゃない。人が集まっていれば、何でも社会だと言うのではなくて、我々が今この時点で言っている意味での社会というのは、どういう条件の下で成り立つのか。このことは、ゴドリエの本の一章全部が、それに関わっているわけです。それで、我々の研究のやり方としても、そこをやっぱり、ちゃんと押さえておく必要

があると思います。

無論、その道は遠いですよね。とても見渡せないというか、とてもじゃないけどそんなふうにして人類の自然史をみるのはもう不可能じゃないかっていうぐらいです。特に、ここでちゃんと議論はできないと思いますが、いわゆる世界システム、つまり資本主義的な社会のあり方が成り立っていない状態というのは、おそらく、そういうのは根底的に破壊されているんじゃないかっていうような見方が一方であります。こういう議論はぐちゃぐちゃなんで、うやむやに終わると思いますけれども、何か非常に負荷が少ない、条件が少ない、その人間の集まりのプロトタイプみたいなイメージというのは、実在したかどうかじゃなくて、理論上の要請として必要だと思います。だから、おっしゃるように、今、我々が観察しているようなものの基に、何があるんだろうかというのは、本当の意味での経験的に確かめることができるかできないかという問題ではなくて、要するに構想の問題として、そういうプロトタイプのな仕組みみたいなものを、どっかで持っていく必要があると思います。例えば、言語と労働との関係は、昔からおなじみのテーマですよ。けれども、それも今では人類学だとか霊長類学だとか認知科学だとか、そういうものの展開からすると、19世紀の偉大な人たちは全く違うプロトタイプを構想することができるんじゃないかという風に思います。

【司会】

実は今の議論ですが、プロトタイプ・人間共通の何かから始まって、さまざまな社会のコードの違い、コミュニケーションの仕方の違いがどういう風に発生していると考えられるか、ということについては、『越境スタディーズ』の第2章に書かれていますので、先生方、それから今日参加してくださっている方々、ぜひご参照していただければと思います。

時間もかなり超過していますので、ここで一回しめさせていただきます。丸井先生には、発起人からのリクエストとして、「研究教育の20年間を振り返って下さい」という形でお願ひしております、当初の、最初の冒頭のご紹介で、非常に多岐にわたる研究をされているという風にご紹介させていただいたところを、丸井先生ご自身に振り返っていただきました。多岐にわたってきている理由というのが、ちょっと見えてきたような感じがするのですが、「異社会」と呼ばれているもの、「異言語」と呼ばれているもの、それをどういう風に捉えられるのか、その捉え方というものずっと模索して、探して、さまざまな本やさまざまな知見をずっと参照し続けて、それでさまざまな方法を試してこられた、そういう20年間でもあったのではないのかなと感じました。研究の始まりから言えば、40年を超える来歴があったのではないのかなと、そのあたりが少し見えてきたように思います。今、ご退職されるにあたって、それが収束しつつあるのが、異なる言語、異なる文化とよばれているもの、異なる社会とよばれているものを、言語的な相互行為を軸にして、交流世界という形で、一種包括的に捉えていく、そのなかに言語も文化も社会も組み込まれていくような、そういうひとつのフィールドとして、ひとつの枠でとらえていくような、そういうところに、丸井先生の研究が今、収束しつつあるのではないのかなという印象をもちました。そこにたどり着く中で、本来ずっと継続されてきた研究と、このプロジェクトの中で行ってこられた地域や飲食に関する研究というのも、今マージしつつあると、そういう形になっているのではないかなと理解させていただきました。

これだけの厚みと幅のある研究を90分でしゃべってほしいというような、もともと非常に無理な話で、圧縮されたお話をお聞きしてなんだか迷宮で迷子になっているような気分もなくはない状況ですが、そのあたりについてはこの後少しインフォーマルな時間をとってお話することもできます

ので、ぜひ丸井先生とまた交流をしていただければという風に考えております。

最後に、丸井先生はもちろんですが、実は今日、この会を準備していく中で、『越境スタディーズ』の共同編集の1人である岩佐光広さん（先ほど質問された方ですが）には、資料の準備・教室の手配などを行っていただきました。それから、国際社会コミュニケーション学科事務室の榎原愛さんも、今回のこの会のセッションを準備していく中で、非常にご尽力をいただいております。丸井先生に感謝の拍手をお願いしたいのですが、合わせまして岩佐光広さん、それから榎原愛さんにも拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。それでは丸井先生、お疲れ様でした。ありがとうございました（拍手）。

資料

「越境」プロジェクト関連成果

<2001>

- ・学会発表「文化比較における極大と極小」、日本比較文化学会研究発表会（福島市）
- ・報告「ワインの人文科学：西洋の飲食文化」、『高知大学生涯学習教育研究センター年報』、平成12年度、98-102

<2002>

- ・論文「言語相互行為理論から見る文化比較」、『国際社会文化研究』、第3号、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科（以下発行所省略）、107-118

<2003>

- ・論文「『地方都市』の『洋食』」、『高知における国際化<ヒト・モノ・情報>』、『高知における国際化プロジェクト研究報告書』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、135-158

<2004>

- ・論文「異文化理解における生活世界の諸関連：ドイツ語圏の飲食を中心に」、『国際社会文化研究』、第5号、19-48

<2005>

- ・論文「環境・飲食・『スローシティー』」、『国際社会文化研究』、第6号、1-35
- ・学会発表「ドイツのスローシティー：対照社会文化誌の視点から」、日本独文学会中国四国支部学会（松山市）
- ・報告「現代ドイツの環食観に関する実態調査 中間報告」

<2006>

- ・著書『スローフードをはぐくむドイツのスローシティー』、南の風社
- ・論文「相互行為・生活形式・生活世界：（独日）対照社会文化誌の基礎」、『国際社会文化研究』、第7号、41-58
- ・報告「ドイツの『スローシティー』」、『現代ドイツの環食観調査報告－地域の価値とドイツのスロー運動』、丸井一郎編、6-49、全79頁、高知大学
- ・学術講演「飲食文化論の人間学的基礎：日・欧の視角から」、日本比較文化学会3支部共同部会（高知市）

<2007>

- ・報告「『環食同源プロジェクト』講演会報告書：スローフード (slow food)・スローライフ (slow life)・スローシティー (cittaslow)!: ドイツの事例に見る」、高知大学年度計画「環食同源」プロジェクト3A「全球化時代の飲食」班、代表丸井一郎
- ・学会発表「全球化と地域の価値」、日本比較文化学会全国大会（徳島市）

<2008>

- ・論文「グローバル化（全球化）言説をめぐって：異文化性の側面」、『国際社会文化研究』、第9号、19-37
- ・報告「環食同源プロジェクトスタディーツアー 持続可能な地域社会 南西ドイツから」、高知大学年度計画「環食同源」プロジェクト3A「全球化時代の飲食」班（代表岩佐和幸）

<2009>

- ・論文「相互行為（コミュニケーション）と料理・飲食：メタ理論的概観」、『国際社会文化研究』、第10号、45-68

<2010>

- ・著書「生活の水準・質・密度：高知で暮らしを考える視座」、『はじめての越境社会文化論』、243-262、高知大学人文学部、共著

<2011>

- ・著書「人々の集まり・相互行為・認知：ことばと共有性」、山下他（編著）『言語意識と社会』、第9章、223-250、三元社、共著

<2012>

- ・報告「『持続可能性』の諸相と地域・交流 -高知へ・高知から-」、2011年度高知大学人文学部・人文社会科学部門プロジェクト（代表丸井一郎）

<2014>

- ・著書「言語相互行為の様式（スタイル）：都市コミュニケーション研究の成果から」、渡辺他（編著）『講座ドイツ言語学 第3巻 ドイツ語の社会語用論』、第4章、61-88、ひつじ書房、共著
- ・学術講演「相互行為様式と中間領域：ドイツの都市コミュニケーション研究の成果から」、日本コミュニケーション学会中四国支部研究会、(松山市)

<2015>

- ・著書「『異文化間コミュニケーション』再考」、岩佐他(編著)『越境スタディーズ:人文学・社会科学の視点から』、第2章、37-57、リーブル出版、共著

言語相互行為理論関連成果（重複分は一部略記し丸括弧つけ）

<2001>

- ・論文「異文化適応教育の諸前提」、『国際社会文化研究』、第2号、25-49
- ・論文「非言語表現の意味作用：異文化適応教育の構成要因として」、『高知大学学術研究報告』、第50巻、211-229
- ・報告「シンポジウム『異文化適応と言語教育』の報告」、シンポジウム「異文化適応と言語教育」報告集、丸井一郎（編著）
- ・(学会発表「文化比較における極大と極小」)

<2002>

- ・学会発表「『ボライトネス』の位置づけ」、日本社会言語学会大会（仙台市）
- ・学会発表「社会から文化を見る」、日本独文学会阪神支部学会（大阪市）
- ・(論文「言語相互行為理論から見る文化比較」)

<2003>

- ・論文 *Aprire (e chiudere) una telefonata: un'analisi contrastiva tedesco-giapponese*, Thuene, E.M./Leonardi, S. (eds.): *Telefonare in diverse Lingue*, 210-248, Milano, J. Schwitalla と共著
- ・論文「言語相互行為の協調様式・相互行為原則・異文化性」、『高知大学学術研究報告』、第52巻、205-215
- ・学会発表「言語相互行為における異文化性」、日本独文学会中国四国支部学会（高知市）

<2004>

- ・論文「『文学テキスト』再考：異文化テキストの理解のために」、『ドイツ文学』、2巻第5号（通巻115号）、16-29、日本独文学会
- ・論文 *Telefongesprache beginnen (und beenden) Deutsch-Japanisch kontrastiv*、『かいろす』、42号、かいろす刊行会、14-59、J. Schwitalla と共著
- ・(論文「異文化理解における生活世界の諸関連：ドイツ語圏の飲食を中心に」)
- ・学術講演「相互行為枠から見た日独語談話行動」、日本語教育学会四国支部学会（高知市）

<2005>

- ・論文「メタコミュニケーションの行為と表現」、『高知大学学術研究報告』、第54巻、13-20

<2006>

- ・著書『言語相互行為の理論のために－「当たり前」の分析』、三元社
- ・著書「日本とドイツの言語行動対照分析：相互行為枠設定について」、町博光（編）『講座・日本語教育学第2巻、言語行動と社会・文化』、162-178、スリーエーネットワーク、共著
- ・（論文「相互行為・生活形式・生活世界：（独日）対照社会文化誌の基礎」）
- ・学術講演「語彙等基本表現のコンテキスト化への補助方策：初級段階での実践例から」、ドイツ文化センター・流通科学大学共催第9回ドイツ語教授法ワークショップ

<2007>

- ・著書「おわりに：コミュニケーションとはなにか」、『越境する人と文化』、終章、277-290、高知大学松尾國彦基金図書刊行会
- ・論文「談話におけるメタコミュニケーションの諸相：その包括的な理解を目指して」、『国際社会文化研究』、第8号、55-75
- ・学会発表「『メタコミュニケーション』の定義をめぐって」、日本独文学会中国四国支部学会研究発表会（徳島市）
- ・学術講演 Wie man ein Gespräch beginnt: Telefongesprache im Deutschen und Japanischen、(どのように話を始めるか：独日語の電話会話)、ヴュルツブルク大学ドイツ語文献学研究所

<2008>

- ・論文「ドイツ語談話におけるメタコミュニケーションの分析」、『ドイツ文学論集』、41号、58-72、日本独文学会中国四国支部
- ・（論文「グローバル化（全球化）言説をめぐって：異文化性の側面」）

<2009>

- ・（論文「相互行為（コミュニケーション）と料理・飲食：メタ理論的概観」）

<2011>

- ・著書「人々の集まり・相互行為・認知：ことばと共有性」

<2014>

- ・著書「言語相互行為の様式（スタイル） 都市コミュニケーション研究の成果から」
- ・学術講演「相互行為様式と中間領域：ドイツの都市コミュニケーション研究の成果から」

<2015>

- ・著書「『異文化間コミュニケーション』再考」
- ・（講演・発表には市民対象の公開講座や民間団体での講話などを含まない。）